

「フィギュール」について (3)

末 松 壽

本稿は¹⁾、『百科全書』第六卷 (1756年) に収録されたデュマルセ (César Chesneau, sieur du Marsais, 1676-1756) による記事 « Figure » を検討することによって、デュマルセにおける「言語の学」(sciences du langage)²⁾、すなわち文法学と修辞学との関連と区別を明らかにし、ひいては18世紀中葉のフランス文化におけるこれらの学の在り方や状況をさぐることを目指している。これまで筆者は、ギリシアに発して何世紀にもおよぶ西欧の伝統が形成してきたフィギュール——これをデュマルセはまとめて紹介しなければならなかった——の組織が、したがってまたそれを表記する用語の体系が複雑で多岐にわたり、また場合によってはすでに古色蒼然たるものであったことを指摘し³⁾、不必要なペダンティズムを排して記述を簡略化する著者の若干の手法を考察した。

その過程で我々はある奇妙な事実に出合った。デュマルセは、一方の端的に文法学に属する、つまり語の形態や文の統辞にかかわるフィギュール (I-1, I-2) の記述においてはより精密でかつ明らかに組織的な分析をしめすのに、他方の修辞学が措辞の分野であつかう、つまり意味 (I-3) や思惟 (II) にかかわるフィギュール、またそのいずれでもないというフィギュール (I-4) についての記述はごく概略的であって、ほぼ名称の列挙で終わっているという事実であった⁴⁾。この不均等な処理に少なくとも相関すると解釈し得る事柄として、筆者は、デュマルセが『百科全書』にあたえた 149編の記事には、文法学、それもとりわけ一般文法学関係のものが圧倒的に多く、修辞学なる分野指定をもつ項目は問題の « Figure » をふくむ4編にすぎず、しかもそれらはいずれも排他的に「修辞学」のではなく、「文法学」や「論理学」との学際的分野指定をうけていて、修辞学はデュマルセのテキストの中にならばたまたま紛れこんだかの如き印象を与えることをしめた。

さて我々の主題である項目にもどり、著者が起草する記事そのものによって、好むと好まざるとにかかわらず実現してしまうフィギュールの組織を観察しなければならない。

IV. 「フィギュール」の組織

転義 (I-3) の論理的秩序に関するかぎり、読者は、その紹介が体系や組織への配慮を欠く記事の代わりに、1730年の著作を参照することができる。というのはその第二章「転義各論」の第21節は「転義の従属関係、あるいはそれらが相互に占めるべき位置およびそれら各々の個別的特徴について」論じているからである。

『転義論』における転義の分類

だが我々はそのに依然として著者の一種の逡巡を見出すことになる。デュマルセはクインティリアーナスを引用して、文法学者や哲学者が転義のクラスの数や各クラスの中の種の数、さらに類種の構成する秩序について大いに論じてきたことを指摘し、主な転義を隠喩 (métaphore)、換喩 (métonymie)、提喩 (synecdoque)、皮肉 (ironie) の4つであるとして、その他はこれらのいずれかに帰属させるフォシウスの説を紹介する。「しかし」と著者は付け加える。「これら全ての議論は実践的には (dans la pratique) 無益であって、確かな対象が全然ないことの多い探究にかまけてはならない」¹⁾、と。ところが、「Figure」でもお馴染みの「無益」宣言をした口の下で、著者自身が個別的な転義の存在に言及し、早速その分類に入るのである。ひとしく言説を構成する判断と実行とのあいだのこの相反に「本音」と「たてまえ」を見分けることはできない。

さて「確かな対象」をもち「自然的関係」の差異にもとづくらしいデュマルセの分類は、以下のようにまとめることができる。

- ① 類似 (ressemblance) の関係による転義
隠喩。濫喩 (Catachrèse) は「隠喩」の「第一の種」。例「用紙一葉」。
- ② 対立 (opposition) や相反 (contrariété) や差異 (différence) の関係による転義
皮肉。例「キノーはウェルギリウスの如き詩人なり」(ボワロオ)。
- ③ 原因から結果へ (de la cause à l'effet)、全体の代わりに部分 (la partie pour le tout)
換喩——二項がそれぞれ独立。「彼はキケロを読んだ」(作者名→作品)。
提喩——ある項が他項に依存。例「百の帆」(部分→全体)。
- ④ あらゆる種類の関係 (toutes les sortes de relation)
引喩 (allusion)——付帯観念の関連性に由来²⁾。婉曲法 (Euphémisme) はその一種 (TDS, pp. 182-183)。

もちろんこの分類そのものがいくつかの疑問をよびおこす。

1° まず、ここで名指されない転義をどう処理するか。項目 « Figure » が挙げるものに限定しても、「Allégorie», « Sarcasme », « Hyperbole » が残っている³⁾。もっとも著者は①において « Catachrèse » につづいて「他の種類の隠喩」(p. 182)を語り、③においても換喩と提喩の「いずれかに他ならない文彩」に言及している。こうして、名称の列挙は完全ではないけれども、漏れたものもこれらの大綱に纏めうることを示唆している。それゆえ潜勢的には分類は全てを掬(救)うだろう。事実、続く第22節冒頭で、他にも様々の名前が提唱されてきたことを指摘し、「これらの名称の理由となった比喩的表現は、私がすでに述べた転義のクラスのどれかにたやすく還元される」(TDS., p. 184)として、「Sarcasme」を例にとり、これを「気難しさや憤激をとまなう皮肉」と定義している。同様に « Allégorie » は「連続する隠喩」である (TDS, p. 146)。こうして少なくとも「主な」転義は全てその位置を見いだすことになる。(もっとも上の説明では①、②、④のいずれに属するのか判然としない « Hyperbole » のような例もあろう)。

2° しかし重大なのは、この秩序づけそのものが、真先に批判の対象となった(16世紀のサンクティウスをほぼ踏襲する)フォシウスの4大文彩説と同じタイプの試みであるという点にある。確かに④は新たな範疇である。これを欠くフォシウスでは « Allusion » などが掬えない短所はあろう。しかしデュマルセのいう「あらゆる種類の関係」は余りにも大まかで漠然としているし、「付帯観念」は他のフィギュールにもあてはまることを考えれば、第4種には明確な固有の特徴(種差)がないことは明らかである。著者は四つのフィギュールに他の全てを関連させる先行者の試みを「彼の言い張る (prétend) ところでは」(p. 182)と形容しているのだが、同じ評価は著者にもはね返ってこないであろうか。フォシウスに対するもう一つの相違——換喩 / 提喩を二つの類として設けず同一類の二種に区分すること——がより優れた編成であるという保証もない。それは、かなり容認された定義であるとしても、厳密に言えば異なる二つの論理的関係を根拠にしているため範疇として単一性に欠ける憾みがあるからである⁴⁾。

3° 他方、奇妙なことにこの分類の提案は各論(第二章)の終わりになされている。あらゆる転義をまず四つの類に区分し、次にそれぞれに属する種を論ずるという演繹的な方法をデュマルセはとらない。なるほど各転義の説明においては相互的な関連づけがなされることはある。けれども、ジュネットも指摘

するように⁵⁾、この四大区分が著作全体の構成に反映することは全くないのである。この事実の解釈を試みなければならない。

まず言えることは、デュマルセが壮麗な組織の構築をよろこぶ「体系精神」の人ではないということである。システムの構築は精神の見解にぞくするものにすぎず、思惟に秩序と精密さを与えるとはいえ、反面それは恣意的になって細部の事実を犠牲にする危険があること、なにより「確かな対象が全く無い」探究になりがちであることを彼は知っているのである。実際 *physique / métaphysique* の判別は、哲学者デュマルセのペンの下で至る所に現れるライトモチーフであることを思い出そう⁶⁾。体系性の欠如を非難する体系精神（例えばトドロフ）に対してドゥエ＝スプランは、キケロ、サンクティウス、フォシウス、コロニアらによる分類を知っていながら、「デュマルセが彼自身の「観察」の階梯づけをしないのは、侮蔑によるものであって、不注意からではない」⁷⁾と書いている。言い換えれば、デュマルセにとっては現実的对象が優先する。それは実践的に「有益なもの」の尊重である。しかし世界を構成するものの全てを形而下的なもの / 形而上的なものという二つの範疇に識別するのはそれほど容易なことであろうか。いささかの躊躇もなく、彼は言っている。

我々は現実的なものと同様に、形而上的なものにも名前をあたえることに慣れている。それは我々が精神の見方 (*vues*) に関してなす考察の結果である。(VPG., p. 606)

しかし一体、すでに「現実的な」事象の命名にとって精神の「まなざし」が無関係でありうるだろうか。精神は、茫洋たる世界のなかから或る特定のものを「切りとる」限りにおいてしか命名し得ない。リングは他の果物ではあらぬものとしてリングと呼ばれる。このリングは他のリングではないリングとして指定される。定かならぬものとして「定かなるもの」からの判別なしにそう呼ばれたであろうか。ところで切断 (*praecisio*)、判別とはすでに精神の見方でなくて何であろうか。逆にまた、上のテキスト自体が示すように、精神について語るときにも、人は「現実的」と措定された事物にかかわるそれ自体「現実的」とされる身体 (*le physique*) の作用をあらわす語、「見方」ないし「まなざし」を隠喩ないし濫喩として用いざるを得ない事実をどう考えればよいのか⁸⁾。「形而上的」なものを対象とするしないにかかわらず、命名は精神の「見方」を前提にする。更にまた精神が見るためには、もしかしたらそこにすでに何らかの仕方ですべての様々なカテゴリーとともに言語が介入するのかもしれない。

« vue » という語とその比喩的な意味を知らずして、デュマルセに従う者たちは形而上的なものの命名の事実を見ることができるだろうか。

ともあれこの形而下 / 形而上の区別というそれ自体「形而上的な」見方によって、デュマルセは事物と実践への回帰の要請に忠実であろうとする。このことを確認して、我々はフィギュールの分類に関して現れるいくつかの個別的問題に移る。

差異と同一性

体系は分類によって、すなわち判別と関連づけの二つの操作の組み合わせによって可能になる。ところで判別は差異によって、関連は同一性によって立てられる。それゆえ我々は、デュマルセによるフィギュールの命名と定義に現れる同一性と差異の機能を考察しなければならない。いくつかの問題を挙げることができる。

* 同一用語の二重使用

一方を « Soliloque » ないしは « Délibération » とすることによって避けえたとと思われる « Interrogation » の二重の使用については先に指摘した。同じ術語が二義性をもつ場合である。ここではもう一つの事例 « Pléonasme » をあげる。すなわち、

① « Fig. de diction » の一つ (I-1-1)。「文字」あるいは「音声」の増加によるもので、例えば *natus* に代わる *gnatus* (語頭音増加)、*religio* に代わる *relligio* (語中間音増加)、*amari* に代わる *amarier* (語末音増加) の類である。それぞれ « Prosthèse » « Epenthèse » « Paragoge » とよばれる (608)。

② « Fig. de construction » の一つ (I-2-2)。「文中に余分の語がある時それが「贅語法」である」。例えば “*Je l’ai vu de mes yeux.*” (私はこの目で見た) (611)。

これらは言語の異なるレベル (語中の音素 / 文中の語) にみられる二通りの現象であるが、それらの間の類比の事実によって同じ名前が使われるのである。後者を贅語法と訳すなら前者は贅音法と訳し分けることができる。

* 同一フィギュールの二つの位置

困惑させる事例だが、「Interrogation」にも似て、一つのフィギュールが体系のなかの異なる二つの場所に位置することがある。同一現象が二つの解釈を受けるのである。「Climax」がその例である。

① « Fig. de mots » の第4類 « Répétition » の一つ (I-4-1°) 「一つの観念から別の観念へと段階的に移るために語が反復されるとき、彼らはこれを climax と呼ぶ」 (619)。ところで「反復」は「転義」でもなく思惟のフィギュールでもない類に属する (619) のであるから、その種の一つに他ならない「クリマックス」が同じ定義に服さなければならないことは論理的必然である。ところが、類について否定された賓辞の一つが、種については肯定される。すなわちこの語のフィギュールは「一つの思惟から別の思惟へと上昇するとき、*figure de pensées* とみられる」 (619、強調引用者) というのである。こうして我々は矛盾する二つの定義をまえにしている。実際 « Climax » は「思惟のフィギュール」の記述で再び現れる。

② « Fig. de pensées » の一つ (II-11)。「La gradation. いわば段階的に思惟から思惟へと常に増大しつつ上昇するときである。我々は climax を語るときにこれに言及した」 (623)。

思惟のフィギュールでありかつあらぬとされる « Climax » は、こうして同一性（無矛盾）の原理に違反するように思われる。実際、あらゆるフィギュールが「語のフィギュール」/「思惟のフィギュール」に分割され、かつこれら二つの類の間に一方にあるものは他方にはあり得ないという相互排除の関係があるのであれば、双方にまたがるフィギュールの存在はこの体系そのものの綻びをしめすことになるだろう。けれども著者のやや不注意な書き方から来るこの相反する位置づけは、決して同一の根拠の肯定と否定に由来するわけではない。それは無矛盾の原理を解除するところの異なる観念に由来する。「クリマックス」は、これを語（能記）の反復とみれば「語のフィギュール」に（そしてその限りではそれは思惟のフィギュールではない）、思惟（所記）の上昇とみれば「思惟のフィギュール」に（そしてその限りではこれは語のフィギュールではない）、つまり同時に二つの類に属するのである。そして寓話のコウモリにも似たこの双義的な性格の付与は、言語記号の二面性の分析に由来する。その意味では二つの定義に矛盾はない。さらに、「語のフィギュール」/「思惟のフィギュール」なる類は絶対に背反的なカテゴリーを構成するわけではないこ

ともわかる。因みに『転義論』は、より下位のレベル——転義の内部——で同じことがおこることを認めて、「ある意味ではある転義に属するが、別の意味では別の転義のもとに整理される」(TDS., II, 20, p. 180) 語もあると書いている。

同様に « hyperbole » はまた別の跨ぎを見せる。すなわち、

①「語のフィギュール」の第三類「転義」の一つ (I-3-7) (618)。

②「思惟のフィギュール」の一つ (II-20)。「hyperbole とは増やすにせよ減らすにせよ誇張することである。」(623)

①についてはデュマルセはいかなる説明も与えていない。もしそこで②の説明がそのまま妥当性をもつとしたら、これが体系の二箇所位置を占める理由は薄弱になるだろう。しかしこれは転義がその一部を占める「語のフィギュール」と他方の「思惟のフィギュール」の判別の問題に他ならない。それゆえ我々はこの基本的な区分に立ち返るのが適当であろう。デュマルセは次のように書いている。

それゆえ語のフィギュールは本質的に語の素材に結びついている。それに対して思惟のフィギュールは言表されるためにのみ語を必要とするにすぎない。それは本質的に魂の内において、思惟の形と感情の種類の内存するのである。(607)

それゆえ、と著者はキケロとともにいう。

あなたが語を変えるなら、あなたは語のフィギュールを取り除くことになる。それに対して、それを言表するためにあなたがどんな語を用いるにせよ、思惟のフィギュールは存続する。(De Orat. lib. III, c. liij)

この概念的な説明だけで思惟のフィギュールとしての「誇張」を理解することは難しい。なるほど著者があげる例、帆でもって船をあらわすフィギュールは、前者の代わりに後者を置くことによってフィギュールではなくなる。誇張語法と同様である。『ロゴス』のあたえる例をとれば、誇張が隠喩とかさなって表現される「書類の山」(une montagne de documents) は「大量の」とか「積み重ね」(gros tas) によって脱文彩化される。他方思惟の誇張は、さほどでもない書類のことを過大評価(または逆に過小評価)することに存すると考えることができる。それを人は書類の山とかこれに類する誇張語法をもって恐

らく表現するだろうが、もしかしたら単に大量の書類というかもしれない。そして後者が語のフィギュールに重ならない思惟のフィギュールとしての「誇張」となるだろう。

だがそれで全てではない。項目には、とりわけ「構文のフィギュール」(I-2)において関係が明確でない二三の事例が出現する。著者自身が批判的留保をつけて紹介する事象の定義について、我々はペダンティックに云々せざるを得ないだろう。

* Syllepse / Énallage / Antiptose

① Syllepse ou Synthèse : « Fig. de construction » の一種 (I-2-3)

「数、性、格の通常の規則に従って語を構成するのではなく、人が精神の内にもつ思惟に関連づけてそれを構成する」、あるいは「語に従ってではなく、意味にしたがって構文を作る」(611) 場合である。論理形式が必要な変形を受けないまま文となって現実化するのである。例としてはすでにみた中性の名詞に女性形の関係代名詞が接続した “monstrum quae” その他をみる。

② Énallage : « Fig. de construction » の一種 (I-2-10)

格のみの異変は antiptose である。けれども言語の類比に従ってそこにあるべき法のかわりにもし別の法があるなら、もしある時制のかわりに別の時制が、あるいはある性の代わりに別の性があるなら、要するにある語に共通の規則に反すると見える何らかの変異が起こるなら、これは énallage である。(616-617)

“agit” の代わりに不定形をもちいた “magnas vero agere gratias Thaïs mihi” (Térence) の例がある。

さて二つの定義①②をつきあわせることによって二つの問題があらわれる。一つは文法に反する格の使用は « Syllepse » とよばれまた « Antiptose » とよばれていることである。後者は前者に属するのかわ。もう一つは、文法的性の濫用が一方では « Énallage » とされ、他方では « Syllepse » ともされていることである。Syllepse=Énallage?

デュマルセはどのようにこれらを判別するのか。一方の « Syllepse » については、ホラティウスが「怪物」を女性扱ったのは、すでに見たように「彼はその精神の内に有していたクレオパトラとの関連で」 quae と言った (611) との動機づけがある。それに対して他方の « Antiptose » « Énallage » については、いずれも処理には評価の言がともなっている。前者については、「文法

規則を無効にしかねない」変異であるから「名に値しない」(615)としてこれを「捨て」、深層構造から発して誤謬の生成を説く。後者についても同様の判断：「文法学者たちは大した道理もなく（これに）言及する」(616)がみえる。そしてそこでも「正規の類比に従って構文をつくる」ために定法の動詞の代補を提案する。こうして三つのフィギュールはいずれも等しく、論理形式に還元する限りでは説明可能な理由をもっていながら、そこから文にいたるプロセスで必要な変形を受けないまま産出されているのである。にもかかわらず著者の評価は異なっている。それに彼はこれら二組の二項の異同を議論しない。もし望むならばこれらのうち一を廃して、それが指示する事象を別の名称で代表させること（術語の儉約）ができたでもあろう⁹⁾。もしくは語そのものが格の異変を意味している「Antiptose」を「Syllepse」の一種として組織することもできただろう。更には「Syllepse」——名詞にあらわれる変異——を、名詞のみならず動詞にもおよぶ限りにおいてより外延の大きい「Énallage」に包括することもできたかもしれない。こうして組織はより秩序あるものとなっただろう。

「Antiptose」はもう一つ別の問題を提起する。

* Antiptose / Attraction

「Fig. de construction」の一つ(1-2-6)を構成する「Attraction」の二重の定義を、連続する二つのパラグラフが与えている。

発話器官のメカニズムによって、ある文字や語に後続したり先行したりする文字や語に変化がもたらされる。こうして、発音しなければならない強い (forte) 文字がそれに先行する軟らかい (douce) 文字を強い文字に変える。(.....) 例えばラテン語においては、ad-loqui の代わりに alloqui と、in-ruere の代わりに irruere といわれる¹⁰⁾。

同じように、ある語に向けられている精神のまなざしのせいで、これに関連をもつ別の語にしばしば相似た語尾があたえられる。(612-613)

後者つまり文法的「牽引語法」の例として、デュマルセは対格 *mediocres* になるべき語が *poetis* に惹かれて与格におかれた有名な “*mediocribus esse poetis*” (Horace) をあげている (613)。このフィギュールの二重性は、音韻と文法という二つの領域に現れる類似の現象として理解することができる。これは複数範疇をまたぐ同一術語の二重使用であって、「贅語法」の場合に比較できる。

しかし引用文の第二パラグラフは問題を提起する。というのは、我々は、す

でに見たように « Antiptose » もまた「格の異変」(616)であることを知っているからである。より正しくは「ある格に代わる別の格」(615)の使用であって、*urbs* (主格)の代わりに対格が現れるウェルギリウスの“*urbem quam statuo vestra est*”がその一例であった。これら二つのフィギュールの定義は、例文に注目する限り相互に入れ換えることができそうに見える。なるほど僅かの差異はある。一方は名詞 *poetis* の格に惹かれての破格であるのに対して、他方は直接目的補語を要求する動詞 *statuo* に惹かれての破格である。そのことは類比主義文法学者による二文章への分析 (*haec urbs est vestra / quem urbem statuo*) によって明らかである。けれどもこれら破格の動機づけ——「精神の目」が関連する別の語にむけられたという事実——は全く共通なのである。だが著者はこれら二つの間の異同の問題に気づかない。もしくは無視する。

第一パラグラフの方も疑問を抱かせずにはおかない。

* Attraction / Archaïsme

« Fig. de construction » に属する « Archaïsme » (I-2-7) とは「古人風の話し方」(613) であり、*illi* の古形を用いた “*olli subridens*” (Virgile) が例となっている。しかしこの例は一種の「牽引語法」——語末の *i* に惹かれた語頭の *o* の転化——を逆行させたものではないのだろうか。そして逆に他方 « Attraction » の例、(*alloqui* になる) *ad-loqui* や (*irruere* になる) *in-ruere* はそれぞれ古風な語形ではないのか。少なくともそれらは語源的な形である。もちろん両者をわかつ差異はある。つまり 1° 後者において続く音素は先行するそれと直接に接続している。2° 後者の *ad*, *in* はいずれも前置詞としても存在する有意味の単位、いわゆる接頭語。それにたいして前者の *o* は無意味の音素、マルティネのいわゆる「第二次分節」^[11] である。3° さらにデュマルセは、前者に関しては通時的な観点から、後者についてはむしろシステム的な観点からみているかと思われる。にもかかわらずこれらのフィギュールは、少なくとも類似した音韻過程を相反する方向から見た「見方」である限りにおいて、独特の関係をもつ事例ではないだろうか。

しかしもっと重要な疑問がある。それは、これらのフィギュールがいずれも「文法的構成」にかかわる「構文のフィギュール」(607) に位置づけられている事実である。著者の考えでは、*ad+loqui* は一種の連辞関係であり、したがって文法現象であるというのであろう。*ad* が有意味である限りにおいて、それは正当化できない理由ではない。しかし別の見方も可能ではないだろうか。与

えられた例はいずれも音韻上の変化であるのだから、これらを「語の物質的な面 (le matériel) に起こる変化」(608) と定義される « Fig. de diction » に属するとみるのである。「Fig. de diction」/ « Fig. de construction » の判別は、これまた絶対に相互排他的なものではないことを認めるべきであろう。

以上で、フィギュールの組織を分節する同一性と差異の関係の検討を終わる。最後に、やや異なる観点から差異に注目することによって項目の思考方法について考えよう。

二項性と三項性

フィギュールの体系がそれ自体伝統的な性格のものであって、古代ギリシアから継承され練り上げられてきた遺産である以上、デュマルセのいわゆる独創性を確定しようとするれば、少なくとも彼が知っていた先行する著者たちとの比較が必要になるだろう¹²⁾。それは我々の力をこえた仕事であるし、我々の意図でもない。ここで試みるのは、要するに多かれ少なかれ伝統的で、多かれ少なかれ独創的であるに違いないこの項目における差異化の様態を記述することである。したがってあれこれの差異の在り方がデュマルセに由来するのかどうかは我々の問うところではない。この記事が範例としてフィギュール思想の構造を発見することを試みるのである。なお、先に指摘したように、「Tropes」および « Figures de pensées » の記述は十分ではないので、ここでの考察からほぼ完全に除外しなければならない。

いくつかの奇妙な現象を指摘することができる。まず類比的な思想がある。

*A. 類比的なもの

範疇を異にして見出される類似の現象である。すでに指摘した例も含めて以下のように列挙することができる。

1° I-1-1) : « Pléonasme » …… 語のレヴェル

I-2-2) : « Pléonasme » …… 文のレヴェル

もちろん「増加」(贅音 / 贅語) という共通の特徴によってアナロジーが成立する。

2° I-1-2) : « Diminution ou retranchement » …… 語のレヴェル

I-2-1) : « Ellipse » …… 文のレヴェル

いずれも「減少」ないし「削除」（音消失 / 省略語法）という特徴をもつ。

3° I-1-3) : « Métathèse » …… 語のレベル

I-2-4) : « Hyperbate » …… 文のレベル

いずれも「位置変化」（音位転換 / 語順転倒）である。

4° I-2-9) : « Antiptose » …… 格

I-2-10) : « Énallage » …… 法、時制、性など

ともに文法規則への違反（格の取り換え / 法などの取り換え）。これは同一レベル（構文）の異なる側面ないし領域にみられる類比である。更に次の例がある。

5° I-4-5) : « Similiter cadens » …… 格、時制の語尾

I-4-6) : « Similiter desinens » …… それ以外の語尾

ともに類似音の反復（同じ格や時制の語尾 / それ以外、たとえば副詞の語尾）である。それぞれに“ubi amatur, non laboratur” (saint Augustin), “facere fortiter, vivere turpiter” (621) の例が挙げられている。なお二つの用語それぞれ自体を並べておくならば « Similiter cadens » の例を構成するだろう。

類比はレベルであれ領域であれ一つの差異を前提として成立している。その意味では差異が同一性を根拠づけるということが出来る。けれども、更に遡行するならば、すべての事例が「語のフィギュール」に属するし、そのうち4°と5°とは更にそれぞれ共通の種（構文 / 反復）に属するのであるから、そこに同一性が働いていることに変わりはない。同一性と差異とはこうして様々の段階で互いに根拠づけあうことによって分類を可能にしている。

しかし、反対ないし対立関係をしめす事例も類比に劣らず重要である。

*B. 反対関係

1° I-1-1) : « Augmentation » (増加)

I-1-2) : « Diminution » (減少)

2° 1-1-4) : « Séparation » (分離)

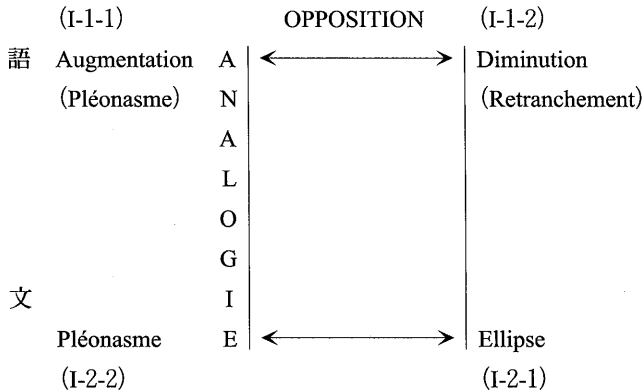
1-1-5) : « Réunion » (結合)

1° 2° とともに語形成における反対の過程を表現している。

3° I-2-1) : « Ellipse » (省略語法)

I-2-2) : « Pléonasme » (贅語法)

「贅語法」についてはデュマルセ自身「省略語法の反対 (le contraire)」(611)と呼んでいる。もちろん B の1°と3°とは A の1°と2°の組み換えに他ならない。これらの関係は次の図によって表すことができる。



つまり、四つの項目は互いに、語 / 文のそれぞれのレベルにおいて対立し合い、そしてレベルを跨いでは増 / 減それぞれの現象として類比しあう。こうして全体として独特の組織を形成するのである。

概念の対立にもとづく反対関係はもう一つある。

4° I-2-7) : « Archaïsme »

I-2-8) : « Néologisme »

予想されるように、「新語導入」のことを著者は「古風な言い回しの反対」(613) という。これだけは通時的対立である。

以上全てが二項対立であること、また対立は同一の種ないしレベル (1°と2°とは « Fig. de diction » の、そして 3°と4°とは « Fig. de construction ») における対立であって、それぞれ同一性を基礎にしている。これら全てが、「転義」を除く「語のフィギュール」に属することは事実だが、すでに述べ

たように、それは「思惟のフィギュール」についての情報が「転義」についてと同様に不足しているという事情からくるのかもしれない、意味や思惟のフィギュールに類比や反対関係があり得ないということではない。

さて、I-1-1)と I-1-2)とは内部にそれぞれ三分岐ないし三項対立をふくんでいる。

*C. 三項対立

1° 1-1)-1° : « Prosthèse »

2° : « Épenthèse »

3° : « Paragoge »

これらは語頭音 / 語中音 / 語末音に現れる音素ないし音節の「増加」現象である。

2° 1-2)-1° : « Aphérèse »

2° : « Syncope »

3° : « Apocope »

語頭音 / 語中音 / 語末音に現れる音素ないし音節の「減少」をいう (608、cf. 605)。

三分岐はII「思惟のフィギュール」のうち「描写」にも現れる。

3° II-6-1): « Personnes »

2): « Lieu »

3): « Temps »

デュマルセは「描写」の対象をこのように三通りあげているが (622)、おそらくこれには「主なもの」という限定をつけて理解すべきであって、ここに完全列挙を主張することはできまい¹³⁾。彼自身「枚挙 (énumération) においては綿密さを避けねばならない」(622)と教えている。それに対して、1°および2°の三分法は事情が異なる。アリストテレスが指摘するように、初め / 半ば / 終わりは全体 (tò hólon) を構成するのであるから¹⁴⁾、これらはいずれも完全列挙を実現しているのである。

最後に、容易にわかるようにCの1°と2°とは一つの新しい複雑な関係を形成する。

*D. 二連の三分岐の対比

Cの1°2°それぞれにおける三項はいずれも語頭 / 語中 / 語末よりなる二つの類似性の系列を構成する。しかるに類似性は1°では増加、2°では減少という反対関係にある。これら二つの特徴によって、この一対は座標軸の上で象限を異にして対応し合う二つの図形の関係に似ている。

以上で、項目 « Figure » の体系を組織する同一性および差異の様態と機能の記述を終わる。

V. 展望

概念の対比としての思想

項目が古典時代の文法学および修辞学のフィギュールについて組織する分類法 (taxinomie) は、一見してそれが与える煩瑣さの印象にもかかわらず、実際には多様なそして時には奇妙な思考方法を内包していることがわかる。『転義論』について語りながら、トドロフはデュマルセには「体系の配慮がない」「体系化する力がない」「一貫性がない」と繰り返し非難している¹⁾。そしてそれに反論してデュマルセを擁護するドゥエ＝スブランの弁明はすでに引用したのだが、そのような個性や独創性をめぐる論争の場面をこえてもっと根本的なところで、フィギュールの思想そのものがすでにある多様で複雑な論理性によって成立していることがわかる。

しかし考えてみれば、二項によるにせよ三項によるにせよ、(ここで取り上げない五項や七項の思考にせよ) 概念の対比こそは多くのいや恐らく全ての思想を組織するもの、思想の構成因ないし条件ではないだろうか。世界、人間、事物、事実……は人が言語を用いて概念をあらわし(あるいは作り)、これらを分節するのでなければ把握することも、解釈することも、伝達することもできないからである²⁾。じっさい思想とは、ある意味で、思想に在らざるものおよび他の思想との関わりから、人が個人的にあるいは集団的に練り上げる概念の関係様態の記述に他ならないとすら見える。絶対的な一元論は不可能であろう。じっさいすでに有 / 無の対比をするのでなくして、「在るものは在り、在らぬものは在らぬ」といえるだろうか。思想史上に見られる幾多の概念対比の例をここであえて挙げる愚はおかすまい。恐らく延々と伸びるリストを作ることができるだろう。

もちろん、ジャンセニストならずとも、対比のための対比、つまり時代の流行とか特定分野における習慣から来るある種の「美」を実現するための作文が愚かしいことは容易に認めるだろう。パスカルは「余りにも正確に対立し合っているため、彼が自分の用語を道理や真理に合致させるよりはむしろ互いに相反するようにもっと腐心したことが容易にわかる」³⁾ ノエル神父の対句 (antithèses) (体系表 II-1参照) を笑う。同じ体験に由来する『パンセ』の一断片は射程を一般化するとともに建築術に比喻をとるアフォリズムとなる。

語句に無理強いして対句をつくる人々は、対称性のためにめくら窓を作る人々に似ている。彼らの規則は、正確に語るのではなく正確なフィギュールを作ることなのである⁴⁾。

区分 (division) に関する諸問題を論じた見事な章のなかで、アルノオとニコルはラムユス (Ramus, 1515-1572) の執拗な二分法を批判する。

ラムユスとその支持者たちはあらゆる区分が二つの枝 (membres) しか持つてはならないことを示すために酷く苦勞した。容易にできるかぎりではその方が良いのだが、明晰と容易さが学問において最も尊重されなければならないのであるから、三つの枝への区分も捨てるべきではない。更にそれがより自然である場合には、そして常に二つの枝へと区分するために無理な下位区分をしなければならなくなる場合には、なおさらそうである⁵⁾。

けれども逆に、概念の対比から自由でこれを完全に免れた思想を構想することは、思想を概念の操作として理解する限り困難であろう。そのことを形而上学の存立にとって概念による表象は無力であると説くベルクソンも指摘せずにはおかない。

概念は (.....) 普通には対を成して二つの相反するものを表象する。二つの対立する見解を同時にとることのできないような、したがって拮抗し合う二つの概念に包摂されないような具体的な現実というものはずない。そこに定立と反定立が由来するのだが、これらを理論的に和解させようと努めても空しい。理由は簡単で、概念ないし観点でものを作るとは決してできないからである⁶⁾。

しかし、形而上学の存立を基礎づけるものとしてベルクソンが主張する持続であれ直観であれ、言語を用いてこれを記述せざるをえない限り哲学は概念の罠を逃れうるのだろうか。弁証法を否定する当の言説そのものが、すぐれて弁証法概念である定立および反定立のほかに、拮抗 / 和解、現実 / 表象もしく

は現実 / 概念、作る / 表象するなど一連の概念対比、二項対比によって書かれざるを得なかったのである。概念は言語によって荷なわれる。少なくとも言語こそは最も有効な概念の記号である。そして語彙は対比によって構成される。周知の「言語には差異しかない」ではじまる節で、ソシュールはこうも書いていた。「言語のシステムとは一連の観念の差異と結びついた一連の音声の差異である。」⁷⁾

実際、日常生活は言語が提供するおびたしい概念の網によって何層にも何重にも組織化されている。対比、とりわけ二項対比は諸言語の語彙に書きこまれていて、それがそこで考えつつ生きる我々の意味論的空間を分割しかつ関係づける。これまた例をあげる必要はない。社会言語学者は言う。「言語活動は対立を分極化させる (...)、すなわちニュアンスなしの二項対立をうちたてる強い傾向をもつ」⁸⁾。

三分岐

しかしこれは、一面の真理をうがつとしてもいささか「ニュアンスなしの」指摘であろう。というのは我々（あるいは言語活動）には、厳しい二極分化に媒介をもちこみ、これを緩和しあるいは二項を関係づける傾向もあるからである⁹⁾。その時には対立は別の形をとる。それにそもそも人は二極分化とともに鼎立に訴える傾向もありはしないか。二項への区分を自然であるならその方が良好とした『論理学もしくは思考術』の著者たちも、あらかじめこう指摘していた。「余りにも対立し合っているとみえるために中間項 (milieu) を許さないと認めながら、それでもそれを有する辞項 (termes) が頻繁にある」(上掲書、162頁)。たとえば無知と物知り、健康と病氣、昼と夜の間の場合である。さらに「二つの悪徳の間には、不敬虔と迷信との間の敬虔のように中間項がある」のみならず、すでに昼 / 夜の例 (夜明け、夕暮れ) がそれを教えるように、「時にはこの中間項は二重になる。たとえば吝嗇と浪費癖の間には気前良さがあり称賛すべき儉約がある」というのである。

『三幅対の哲学』において、哲学の基本的な思考方法として二項対比に劣らず鼎立に注目し、古代から近代にいたる諸々の哲学における概念の分節を検討するミシェル・ピクランは、真先に次のように指摘している。「三項図式は最も多様な領域に現れる。それは審判となるような第三者への絶えざる呼びかけである (.....) それは実際、悟性のア・プリオリの形なのである」¹⁰⁾。他方、複数の二項対比の組み合わせ方に3が現れうることを著者は思い出させる。すな

わち、

たとえば善と悪のように一対になる概念がある。けれども善でも悪でもない何かがある。すなわち真であって、それには偽が対立する。さらに真にも偽にも属さない何かがある。すなわち美であって、それには醜が対立する。こうして (.....) 結局は、それぞれの対立物とともに三つの価値論的カテゴリーがあることになる。更に次のことをいう必要があるか。方向は四つではなく六つある、と。じっさい南北（これらは方位ではなく極である）と東西（これらは極ではなく方位である）に鉛直線の定義、つまり天頂 (zénith) と天底 (nadir) を加えなければならないからである。(op. cit., p. 12)

真善美と同じく¹¹⁾、後者もまた本来は極 / 方向 / 鉛直というそれぞれの二項対比の複合体、三幅対からなるというのである。

我々が容易に思いつくことのできる概念対比のパラディグムも様々な問題を含むと考えられる。ここでは三項関係について一二の観察をしておく。

聖ヨハネの『書簡』のいわゆる “concupiscentia carnis, concupiscentia oculorum, superbia vitae”¹²⁾ の言い換え（解釈）であるパスカルの三項対比：“libido sentiendi, libido sciendi, libido dominandi”¹³⁾ は人間の諸機能を三分し、（作用から原因への遡行をうながす換喩的作用によって）それらの機能をはたす能力ないし器官を予想させる限りにおいて、「三つの秩序」の断章という身体 (corps) / 知性 (esprit) / 愛徳 (charité) につらなる¹⁴⁾。愛徳に最もよく似ていて最も遠いもの、いわばその虚像は貪欲 (cupidité) である¹⁵⁾との指摘を思いだすこともできる。階梯性をともなうその差異の様態は、例えば「自由、平等、兄弟愛」のパラディグムを分かちかつ関連づける思想には無縁である。ソスュールによる記号の定義のみせる三項関係¹⁶⁾やヘーゲルの弁証法の定式のそれとも異なる。これら後者も互いに似ていながら同じではない。ソスュールの記号が静的な分析もしくは構成であるのにたいして、ヘーゲルは植物の成長——芽、茎葉、花、実——の例に従うなら¹⁷⁾、動的な総合、(自己) 否定をともなう生成をしめすからである。要するに、二項関係の関係性の様態とおなじく、鼎立のそれも様々であって、これを記述する試みがなされてしかるべきであろう。

先に引用したピクランの指摘の最後の例が今日いささか奇妙なパラドクスの印象をあたえるのは、方位に関して今日では常識が東西南北の二通りの二項対比で（それどころか「四方」という粗雑な把握で）満足しているという事実由来する。つまりかつての西欧の知見は宇宙観の変化とともに三幅対の思考か

ら二項性のそれに変わったということである。日本においても同様で、我々は四方は口にするけれども、これに天地をくわえた六方あるいはリクゴウ「六合」を語ることはもはやない¹⁸⁾。対概念の軸の放棄によって思考形式が変わる例を他にも発見することはできないであろうか。

結 論

デュマルセの表出するフィギュールの思想は、その発想の基本としては二項対比によっている。まず何よりも根本的な「語」/「思惟」の区別があって、これがあらゆるフィギュールを二つに分割する。それは言語 / 言語主体の区別に重なる。そして「反対関係」(B)のみせるいずれも語に属する二分法がある。それらは同じレベルにおける範例としての反対性である。そのうち一つだけが通時的な対立であるのに対して、他はすべて共時的なあるいは凡時的な対比を示している。このことはフィギュールの思想が、当然のことながら歴史学の時代以前の学であるという事実を再確認させる。もちろん記号論にみる「固有の」/「比喩的」意味の二分法や存在論・認識論にみる「形而下的」/「形而上的」の二分法を忘れてはならない。なおBの一つは「二連の三分岐の対比」(D)を基礎づける。更に「語」にかかわる語形 / 文法の段階的二分法がAの類比関係を可能にする。もっとも語形（「物的な面」）/ 文法（「構文」）はこれに「記号作用」を加えて三分法を実現しているということもできる。じっさい三項対比(C)もまた無いわけではない。同一性は常に上位概念（類、種）の媒介によって確保されるが、差異の原理は多様である。客体 / 主体、パラダイグム区分、共時的 / (通時的)、レベル（語形 / 文法 / 記号作用）、用語の意味する概念上の反対性などである。こうして、千年をこえて集团的に練り上げられた言説の組織は、優れて悟性のア・プリオリの形を実現したにちがいない。しかし悟性の形とはまたその限界でもあっただろう。西欧の知性は、そして我々は二項性や三項性の図式を（人工頭脳が支配しつつあるこの時代にとりわけ前者を）こえていけるのだろうか。

「フィギュール」について（3） 注釈

- 1) 本稿のすでに発表された部分の枠組みは次のとおり。

序論

I. フィギュールの煩瑣さ

項目の外観 / デイレンマ / 名称の誘惑

II. デュマルセの処理法

単純化 / 脱ペダンティズム

(以上「フィギュール」について (1)、九州大学文学部『文學研究』第95輯、平成10年3月、121-145頁所収)

体系化 / 脱フィギュール / 大衆化 / 「フィギュール」の組織

III. デュマルセの『百科全書』への寄与

ダランベール、デイドロ、デュマルセ / デュマルセの執筆した項目

(以上「フィギュール」について (2)、同上『文學研究』第96輯、平成11年3月、83-106頁所収)

なお « Figure » (*Encyclopédie*, t. VI, 766B-772B) への参照は Du Marsais, *Les véritables principes de la grammaire et autres textes, 1729-1756*, C.O.P.L.F., Fayard, 1987 所収のテキスト (pp. 605-626) による。以下 VPG と略記。

- 2) フーコー (Foucault, *Les mots et les choses*, Gallimard, 1966, p. 98) に負う表現。
3) 学問が長年にわたって多数の人々によって構成されてきた場合の錯綜した在り方を、一定の計画なしに形成されてきた古い都市に比較する哲学者の指摘を思いだそう。Descartes, *Discours de la méthode*, C.O.P.L.F., Fayard, 1987, pp. 15-16.
4) I-1, I-2...については末尾の体系表参照。

IV

- 1) Dumarsais, *DES TROPES ou des différents sens, FIGURE et vingt autres articles de l'Encyclopédie, suivi de L'ABRÉGÉ DES TROPES de l'abbé Ducros*, Présentation, notes et traduction par F. Douay-Soublin, Flammarion, 1988, ch. 2, XXI, p. 182 (以下 TDS と略記)。
2) 付帯観念 (idée accessoire) はポール・ロワイヤルの『論理学』(Arnauld et Nicole, *La Logique ou l'art de penser* (1662), 5^e éd. 1683, I, ch. XIV, P.U.F., 1965, p. 94 sv.) からくる18世紀に有名な概念で、言語学者のいわゆる共示 (connotation) を思わせる。
3) 『転義論』はこれ以外に « Métalepse » (一種の Métonymie とされる) (p. 110)、« Antonomase » (一種の Synecdoque, p. 123)、« Syllepse » (一種の Métaphore ないし Comparaison, p. 145) を挙げ、さらには他のクラスへの関連を指摘しない « Hypotypose » (p. 133 sv.)、« Périphrase » (p. 167 sv.)、« Hypallage » (p. 172 sv.) を論じている。
4) 文彩を二分するヤコブソンの有名な学説は、デュマルセの議論に呼応する。それは 1° 類似をもって隠喩の、隣接をもって換喩のそれぞれ本質的差異とし、2° 提喩は換喩の一種と見なす (デュマルセはこれらを同一種に属させる) ことに存する (R. Jakobson, « Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances » (1956), in *Language in Literature*, Harvard University Press, 1987, pp. 95-114, et pp. 511-512 pour les notes. Cf. *Essais*

- de linguistique générale*, trad. N. Ruwet, Ed. de Minuit, 1963, pp. 43-63). しかし問うことができる。換喩は常に隣接に基づいているかどうか。他方リクールも指摘する (P. Ricœur, *La métaphore vive*, Seuil, 1975, p. 153) ように、第二の還元は等位 (coordination) と従属 (subordination) との論理的差異を無視することではないかどうか。より詳細な検討は拙論『ルイ大王の世紀』における比喩 (2)、九州大学文学部『文學研究』、第百輯、2003年3月、91-116頁参照。
- 5) G. Genette, « La rhétorique restreinte », *Figures III*, Seuil, 1972, pp. 24-25. もっともジュネットはデュマルセが転義全体を三つの原則に従属させた、としている。即ち Similitude (1 に対応)、Contiguïté (3に。勿論ヤコブソンの場合と同じ問題を抱えている)、Opposition (2 に対応) である。4) は脱落している。これらの点には解釈者の「体系精神」による還元の傾向を見ることが出来る。
- 6) 筆者が気付いた *physique (réel) / métaphysique (abstrait)* を区別する箇所を挙げれば « Abstraction » (VPG, p. 141), « Article » (pp. 255, 264, 292), « Ce... » (p. 337), « Education » (p. 563)...がある。因みにデュマルセによる「形容名詞」の第一の区分はこの識別に基づく (« Adjectif », p. 183 sv.)。なお G. Sahlin, *César Chesneau Du Marsais et son rôle dans l'évolution de la grammaire générale*, Macon : Protat Frères, 1928, p. 181 sv. 参照。
- 7) Douay-Soublin, « Présentation », TDS, p. 22. またデュマルセに知られていたクインティリアヌス以来の主な転義の分類法の解説は、同書 « Notes », p. 282-283, n. 5 ; pp. 287-289, n. 1 参照。
- 8) デュマルセ自身 « *vue* » の隠喩的意味を解説している (TDS, II, 4, p. 141)。
- 9) ポーランは « Fig. de construction » の一つに « Syllepse » をあげるが、他の二つには言及しない (J. Paulhan, *Traité des figures ou la rhétorique décryptée* (1953), in *Œuvres Complètes*, II, Cercle du Livre Précieux, 1966, p. 215)。
- 10) 他のところでデュマルセは、*bain / pain, doge / toge, glace / classe...* を対比して、前者の系列を “*douce*” “*faible*” とよび後者を “*dure*” “*forte*” とよんでいる (« *Consonne* », VPG, pp. 407-409)。濁 / 清の対比である。しかしこの音韻論的な定義はここ (d / l, n / r) では有効性をもたない。
- 11) 第一次分節、第二次分節については、その *Eléments* の他に A. Martinet, *Langue et fonction* (1962), trad. H. et G. Walter, Gonthier, 1969, pp. 33-36 参照。
- 12) ドゥエ＝スプランは TDS の注釈でしばしばこれを試みている。
- 13) 「描写」を想像の文彩に位置づけるポーランは « *Topographie* » « *Prosopographie* » の他に « *Ethopée* » (性格描写) « *Hypotypose* » (活写法) などをあげているが、逆に「時」のそれ (Chronographie?) は挙げていない (*op. cit.*, p. 204 sv.)。
- 14) 「一全体とは初め、半ば、終わりをもつものである」(『詩学』1450 b 26)。「世界とそれがふくむ一切のものは3の数で規定される。終わり、半ば、初めが全体なるものの数をなすからである」(*Traité du ciel, début*, cité par M. Piclin dans *les Philosophies de la triade ou l'histoire de la structure ternaire*, Vrin, 1980, p. 15)。

V

- 1) T. Todorov, *Théories du symbole*, Seuil, 1977, pp. 89, 119...
- 2) Cf. G. Deleuze et F. Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie?*, Minuit, 1991, p. 95.

- 3) Pascal, *Lettre à Le Pailleur* (1648), *Œuvres Complètes*, t. II, éd. J. Mesnard, Desclée de Brouwer, 1970, p. 564.
- 4) Pascal, *Pensées*, 466 (éd. Sellier)-559 (éd. Lafuma).
- 5) Arnauld et Nicole, *op. cit.*, p. 163.
- 6) Bergson, « Introduction à la métaphysique » (1903), in *La pensée et le mouvant* (1934), *Œuvres*, édition du centenaire, 2^e éd., P.U.F., 1963, p. 1409.
- 7) Saussure, *Cours de linguistique générale* (1915), Payot, 1972, p. 166.
- 8) M. Yaguello, *Alice au pays du langage : Pour comprendre la linguistique*, Seuil, 1981, p. 186.
- 9) アジェージュも、言語(学)および諸学における概念対比の重要性を語る一方で、それを逆に緩和する傾向を指摘している (Claude Hagège, *L'homme de paroles : contribution linguistique aux sciences humaines* (1985), Fayard, 1996, pp. 57, 108, 143).
- 10) M. Piclin, *op. cit.*, p. 11.
- 11) ここに三幅対をみることの正当性は「真善美」といった表現の存在を証拠として納得することができる。なお哲學家もこれを標題とした研究を著している。Victor Cousin, *Du Vrai, du Beau et du Bien* (1853), 21^e éd., Didier et Cie, 1879.
- 12) *Epistola Iohannis I*, 2, 16.
- 13) Pascal, *Pensées*, S. 460-L. 545. アウグスティヌスは第三項を様々に表現している。例えば « ambitio saeculi » (*Confessions*, L. X, XXX, 41), « dominandi libido » (*Cité de Dieu*, L. I, t. I, Garnier Frères, imp. 1957, Préface, p. 4; cf. XXX, p. 98). なおアウグスティヌスおよびジャンセニウスからパスカルに至るこの定式の意味の展開については、G. Rodis-Lewis, « Les trois concupiscences » in *Pascal, Textes du Tricentenaire*, A. Fayard, 1963, pp. 81-97 参照。
- 14) Pascal, *Pensées*, S. 339-L. 308. なお心 (le cœur) / 知性 / 愛徳 (S. 329-L. 298) 参照。
- 15) Pascal, *op. cit.*, S. 508-L. 615.
- 16) Saussure, *op. cit.* pp. 98-99.
- 17) Hegel, *Phénoménologie de l'esprit*, trad. J. Hyppolyte, t. I, « Préface », Aubier, 1939, p. 6.
- 18) 筆者の出合った「六合」の近代の用例を挙げる。「..... 盛大なる祭事は執行された。天地六合いよいよ澄み渡り、空中一点の雲翳をもとどめざる、えもいはれぬ朗かな光景であった。」(出口王仁三郎『靈界物語』(大正10年—昭和9年)、愛善世界社、第二巻、平成5年(第二刷、平成8年)、45頁。また第一巻、131頁および201頁参照)